

機友会しよニュース

(題字は村山五周氏)

機友会全国規模支部結成に寄せて 立命館大学機友会 会長 島田泰男 (昭和二十二年卒)

錦秋の候、会員の皆様には、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。平素より本会の諸活動に何かとご支援を賜り、誠に有り難く厚くお礼申し上げます。

さて、立命館大学理工学部は昭和一三年に立命館高等工科学校として発足以来、このほど六〇周年を迎え、幅広い記念事業を実施するとともに、本年一月二四日にはJ.R.京都駅ビル内の「ホテルグランヴィア京都」にて、理工学部創立六〇周年記念校友大会が盛大に開催されました。おりしも、機械工学科出身の大南正瑛先生が二期八カ年の総長任期を満了される時期とも重なり、大南前総長への謝恩会も兼ねたイベントであったわけであり、機友会会員をはじめ多くの理工学部校友各位の絶大なご支援を賜りましたこと、ここに重ねて厚くお礼申し上げます。

省みますと、大南先生が総長・学長に就任の折に、兼任は困難とのことと機友会会長をバトンタッチさせて頂いた当方としては、会員各位のご支援のもとに大南先生が総長職を全うされる上で、いささかなりともご支援を致すべく努力させて頂いたわけであり、その効果の程は明確ではありませんが、大南先生の総長ご在任期間中に理工学部のB.K.C.への拡充移転や経済・



経営両学部のB.K.C.への新展開、さらに大分県別府市に来年四月に開設予定の立命館アジア太平洋大学の開学など、次々と大型プロジェクトが立案・実施される中で、本学園のトップリーダーとしての大南総長のご活躍に對して、機友会会員各位の物心両面の幅広いご支援が少なからず激励になったものと確信致します。様々の局面で多様なご支援を頂きました校友各位に衷心より謝意を表します。

関東支部、中国支部、九州支部、四国支部の順に支部設立が実現し、本年一〇月一日には十二番目の支部として北海道支部の設立総会が開催されました。北海道地区には立命館大学の付属高校として立命館慶祥高等学校(来年から中学校も併設)が平成八年に開設されており、慶祥高等学校の会議室をお借りして北海道支部設立記念総会を開催されたわけであり、本誌の支部だよりの記事に掲載されていますので、ご参照頂ければ幸いです。

このように機友会は今、北海道から九州・沖縄までまさに全国規模で支部組織が設立されたことになりました。大南前会長が積年の願いとしておられた全国支部組織の確立が比較的短期間に実現できましたことは、全国各地で厳しい状況の中で逞しく粘り強くご活躍されておられる校友各位の温かいご支援の賜物でございます。各支部設立にあたり多大のご支援を頂いた会員各位ならびにその後、支部運営に様々のご支援を頂いた支店多数の会員諸氏に、ここに重ねて厚くお礼申し上げます。次第でございます。

ところで、このように機友会の全国規模の支部組織がほぼ完成した段階に至りましたこと、また、大南正瑛先生が二期八カ年の総長任期を華々しいご功績を残して満了されたこと、この二点は小生にとって大きな節目でございます。大南先生がしばしばお口にされた言葉を借りれば、当方なりの「達成感」を多少なりとも感じております。

何事につけ、ものごとには潮時があります。小生は、この潮時に、本会の会長職を後進に託したく、このほど本役員会にてご審議をお願いし、次期会長の選任を第十七回臨時総会にお諮り願うことになりました。立命館大学機友会が新会長のご指導と会員各位のご支援により、なお一層発展することを念願致しております。全国規模の支部組織は設立もさることながら、日常的な運営と今後の発展が設立以上に大変な大事業になるかと推察致します。新会長を中心に各支部と本部との連携を

一層堅固にし、楽しく力強い機友会がさらに大きく前進することを願ってやみません。

母校では、現在、各学部ごとの同窓会組織の確立が推進されておりまして、理工学部では従来から機友会をはじめ建設会、電友会、応化会、情報会など各学科単位の同窓会がございまして、それぞれ独自の活動を展開しておりますので、理工学部として屋上屋を重ねることを避けてこれからの学科ごとの同窓会を横に連携させた一理工学部同窓会連絡協議会」の設立準備が進んでおり、当方が準備委員会の委員長を仰せつかっております。おそらく今年度中に設立総会が開催されることとなりますが、本協議会の活動や運営につきましては、別途広報の方法を検討させて頂きたく存じます。新たな会費負担などはお願いたしません。新方針でございますので、この組織につきましても格別のご理解とご支援を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

それでは、会長職在任中の皆様方の多大のご支援に對しまして、ここに重ねて厚くお礼申し上げます。同時に、会員各位のますますのご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

立命館と私 自由と清新の

立命館スピリットを求めて
前総長・学長 大南正瑛

(一)

私が立命館大学理工学部機械工学科へ入学した一九五〇(昭和二五)年から数えて四八年およそ半世紀がたちました。この間、六年間を京都大学、一年余りを米田コロンビア大学で学んだほかはすべて夢多き母校・立命館で学び教えたことになりました。学生時代に口ずさんだフランスの詩人のルイ・アラゴンの「教えることは、ともに希望を語ること。学ぶとは、誠実を胸に刻むこと」ということを思い出します。機友会会員の皆様も同じく立命館を母校として、数々の思い出をおもちのこと

とどろうと思えます。私は立命館を私の半生の職場として、日本の高等教育と学術研究の発展のために微力ながら参加してまいりました。そして、日本のバブル経済が破綻した直後の八年前に、総長・学長に選出されてからは、生徒の学びがいと研究しがたい、そして一七〇〇人をこえる教職員の研究がい、働きたい、生活の安定をつねに頭におかなければならぬ身となりまして。

(二)

週少なくとも二回の東京出張のための行き帰りの新幹線の中で、また夜遅く枕元に積んだ本から手を離してしばし黙想する中で、頭から離れないことは、日本の大学とりわけ日本の私学の立命館の現在と未来のことです。日本の私学は一世紀をこえる風雪のなかで栄光と苦難を重ねてきました。一世紀以上におわたって強かに発展してきた日本の私学が今後衰退することは考えられない。また日本と世界でおそく大学そのものが衰退し消え去る歴史がないなどと気楽なことを考える一方、少子化で大学の社会的存在意義が厳しく問われようとしているいま、二一世紀の日本の私学も決して安泰ではありえないと考えます。「私学の時代」といわれるのは私学の優位な特色を社会的に發揮できる自立自尊の努力があつてこそ実現できるのです。それゆえに「私学の盛衰は日本のこれからの命運を左右する」といわれるのだと思います。

総長・学長職は精神的に孤独なものかも知れません。孤独であることは、同僚や友人と談笑し社会で多くの知人やネットワークをつくっていく上で何ら支障になるものではありません。そうではなく、行政のトップにある者は、何よりも人の意見に耳を傾けるとともに、公の立場から自分で決断しなければならぬ以上、精神的に他力依存や横並び志向では駄目だと思えます。孤独に耐え挑戦してこそ、その職責を全うし、立命館スピリットである自由でインベティブな精神を体得できるのだと思えます。この八年間、自分の自

立なくして行政のトップは務まらないことを思い知らされました。私は、故廣慶太郎前校友会会長（株式会社タボタ相談役）からいただいた先生の講義テープ『三事忠告を読む』「中国の張義浩（一六九一—一三二九）が経政家の心得として著したものの」の第一講の冒頭における「仕官（就職）して而して将相（トップ）に至るは人情の榮とする所なり」と是れ榮えなるものは辱（はじ）の基なるを知らざるなり」という言葉を重く受け止めてまいりました。トップとして身を修めることの難しさと大切さをつねに反省する八年間でもありました。

しかし何よりもまず感謝しなければならぬことは、立命館をはじめ多くの皆様のご支援とお力添えをいただいていたことです。それは多くの敬慕する先生や友達、信頼し相談できる同僚や友人そして成人された多くの後輩や卒業生の皆さんの知遇をえたことでもあります。

まず昭和五五年に末川博先生の入学式祝辞に感激し、先生のご自宅の応接室にも学友と何回もお邪魔をいたし、その後も数々のご指導と励ましを受けたいです。

また学園紛争時とその直後の総長・武藤守一先生や細野武男先生、第三次長期計画を準備し実践された天野和夫先生、谷岡武雄先生のもとで、私は教育学部長をはじめ様々な役職を通して歴代総長先生のお世話になりました。ありがたいことと心から感謝いたしております。それだけではありません。西村清次前理事長、故廣慶太郎前校友会会長、川本八郎現理事長、河原四郎現校友会会長をはじめ多くの役員、教職員の皆様から温かいご支援をいただき、言い尽くせない感謝一杯であります。また私の出身学部の理工学部の教職員と卒業生の多くの皆様から温かいご支援とご協力を頂き心から感謝いたしております。

このように私が立命館の卒業生ということもあって、私の浅学非才を大目にみていただいたのだと思っています。そしてまた母校であるがゆえに、私に



これだけの自由を与えていただいたのだと感謝しています。戦後五〇年、日本人は多くの苦節をのりこえて世界でその名譽ある地位を占めたいと努力を致し、社会的レベルでみて民主主義、平等、経済発展と民生の安定についてはかなり発展させることができた。しかしながら、社会と個人のレベルからみて、自由という自己に責任をもち自己を確立することと、歴史的社会的に重大な節目において革新（イノベーション）の精神を貫くことについては「平等」ほどには発展できていないと思います。それはまさしく二一世紀の日本人の大きな課題であると考えています。

(三)

一昨年、京都大学は創立一〇〇周年を迎えました。創立時の文部大臣が西園寺公望であり、そのときの京都帝国大学の書記官、今でいう事務総長が中川小十郎でありました。西園寺公望は立命館の創始者・学祖であり、中川小十郎は立命館学園の初代総長です。両大学は、西園寺公望が生涯標榜した自由主義、国際主義の精神をよく体現してきました。その意味で、私は縁あって立命館と京都大学で学ぶことができたことをたいへん幸せに思っています。なかでも、日本における金属疲労の研究の草分けの第一人者であり日本学士院会員でもあられた京都大学の西原利夫先生の最後の助手を勤めさせていただいたことは、私にとって生涯忘れられないことのない思い出です。先生は、当時の京都大学で「西原天皇」と呼ば

れていました。私には先生の最後の助手ということもあって、厳し中にも励ましとユーモアをもって接していただいたことに感謝いたしております。研究者がどのような指導者の下で研究をスタートするかは運命的でさえあると私は思っています。それゆえに、教員や先輩が後輩や若い人たちにできることは、自分の体験を通して、学習・研究の夢を語り継ぎ、新しい動機づけを与えることに尽きると、私は考えています。その任務は非常に重いものですが、いま大学改革の重点の一つはそこにあると、私は思っています。

(四)

本学は来年に立命館創始一三〇年・学園創立一〇〇周年を迎えます。私どもは、次の一世紀の立命館のあり方を構想し、第五次長期計画の斬新な教育研究事業に学生諸君とともに鋭意取り組んでいきます。二〇〇〇年四月に開設予定の「立命館アジア太平洋大学」（申請中）はまさに「自由と清新」という建学の精神と「平和と民主主義」の教学理念を創造的に展開する画期的な事業であると考えています。それは、いままでの日本にはない、真に国際的な世界に開かれた大学です。それはまた二一世紀のアジア太平洋時代を担う有為の人材育成の拠点大学であるとともに、「アジア太平洋学」という新しい学問研究の拠点大学をめざすものです。その高い志に共感された世界と日本における各界各層の皆様、とりわけ平松守彦知事をはじめ大分県と別府市の絶大なご支援を受けながら開設に向けて鋭意取り組んでいきます。ありがとうございましたと感謝しております。

(五)

私は「夢、それは実現するもの」という言葉が好きです。個人的レベルであれ社会的レベルであれ、何か事を起こすとき、まずその動機（モチベーション）の水準が問われます。真に創造的な仕事をやる個人や社会集団は、すぐれてその動機的水準が非凡であります。そのような動機をもって事業目標や夢を構想し、その実現に向けて全身全霊を打ち込んで持続的な努力をする

ことによつて、その核となる達成感あるいは達成能力（私はこれをコア・コンピテンスと呼んでいます）を関係者が共有できるほど素晴らしいことではないかと思えます。

それは個人的レベルにおいては人生の質（クオリティ・オブ・ライフ）を大きく高めるものです。この一〇年間立命館を振り返るとき、先人が切り開き私たちがその手にしなかり握ることのできた成果に依拠しながら、一方で今までの概念や慣習を打ち破り新しい創造的挑戦を行ってきたと思えます。それはまさに自由開達にして革新的（イノベティブ）な取り組みであったと思います。私たちは建学の精神や教学の理念に現代の光を照らし、歴史の重要な節目において、全学の知性と勇気をもって、それらを世界と社会に明快に発信するなどの創造的な実践を行ってきました。それは横並び志向ではない、他大学との違いや特色を明示して行動する、大学を構成する一人ひとりの取り組みであったと思います。社会は先達者や責任ある立場にある多くの人々の知性と勇気によって変革される社会の中でその意識改革が進むのでありましょう。そのような相互関係の一端に関わらせていただいた立命館と私の半生であったと思います。「立命館学園広報UNITAS」第三二二号（一九九九年一月）の「大南総長を送る感謝の集い」での挨拶文をもとに、機友会ニュースに転載させて頂きました。



機友会滋賀支部第4回総会



支部だより
 楽しく力強い
 「びわこ機友会ニュース」
 滋賀支部長 山田元助

びわこ機友会ニュースは、当支部の基礎固めに大きな役割を果たしてきましたが、平成十一年一月に第四号を発行します。
 当支部総会は隔年開催ですが、本年の様には総会を開催しない年に発行してまいります。
 第四号の主な内容は、①当支部の記録②母校の研究交流③当支部第四回総会④理工学部創立六〇周年⑤躍進を続ける滋賀県⑥母校のアメリカンフットボールです。
 特に②の研究交流には具体的にシスデムも解説してあつて昨年開催の当支部総会での行事と共に、現在の不況打開に努力中の会員に貴重な示唆を与えるものです。
 全国会員の皆さん、BKC所在地の滋賀県は、日本のほぼ中央にあつて多

くの特徴をもっています。「みどり」と風が彩る琵琶湖の景観、はるかに古典の世界に似せぬ歴史、そして次々と誕生する新しい魅力、多彩な自然の表情とやさしい人の温もり、更に次代の活気があふれています。地元の会員として、BKCの発展に出来る限り支援を致したく、今後共よろしくご指導の程お願い申し上げます。

終わりに滋賀県の特徴の一端を経済企画庁による統計数値で時系列的にご紹介して「むすび」と致します。

1人当たり県民所得の都道府県別推移 (単位:千円)

昭和55年度		昭和60年度		平成元年度		平成8年度	
1	東京 2,339	1	東京 3,224	1	東京 4,258	1	東京 4,330
2	大阪 1,942	2	大阪 2,587	2	大阪 3,179	2	大阪 3,888
3	神奈川 1,893	3	愛知 2,437	3	神奈川 3,007	3	愛知 3,557
4	愛知 1,867	4	神奈川 2,389	4	愛知 3,002	4	大阪 3,506
5	広島 1,770	5	埼玉 2,270	5	愛知 2,914	5	大阪 3,438
6	京都 1,756	6	愛知 2,252	6	静岡 2,899	6	神奈川 3,413
7	兵庫 1,741	7	静岡 2,192	7	愛知 2,858	7	大阪 3,343
8	埼玉 1,705	8	京都 2,189	8	埼玉 2,801	8	神奈川 3,313
9	千葉 1,704	9	兵庫 2,179	9	大阪 2,780	9	愛知 3,208
10	山梨 1,683	10	兵庫 2,156	10	兵庫 2,701	10	山梨 3,197
11	静岡 1,682	11	広島 2,150	11	京都 2,690	11	山梨 3,186
12	新潟 1,671	12	山梨 2,138	12	群馬 2,684	12	群馬 3,171
13	北海道 1,660	13	山梨 2,114	13	群馬 2,662	13	群馬 3,161
14	北海道 1,660	14	山梨 2,104	14	茨城 2,638	14	群馬 3,161
15	石川 1,658	15	富山 2,089	15	茨城 2,612	15	群馬 3,110

(資料出所)経済企画庁 (※平成11年2月16日発表)

躍動的な兵庫支部をめざして
兵庫支部長 大庫典雄

最近、トルコ、台湾、メキシコと大地震が続いています。阪神淡路大震災から、間もなく五年になります。被災した大勢の校友もおかげさまで、元気に活躍しております。

兵庫支部は、その阪神淡路大震災の一〇ヶ月前の平成六年三月に六番目の支部として設立されました。定期的な役員会を開催し、情報交換



をしながら、「兵庫支部だより」の発行、「兵庫支部会員名簿」の発刊、BKCの見学会、会員企業の見学会等の活動をしてまいりました。

第三回総会は、平成一〇年六月六日に、明石海峡大橋の開通を記念して、船上から世界最長のつり橋と景勝の須磨、舞子、明石、淡路島を眺め、形式ばらずに会員相互の親睦をはかることを第一に考え、「クルージング総会」としました。機友会本部より大金晋副会長、役員の酒井達雄教授、小野健二様より「明石海峡大橋を支えるテクノロジー」と題してお話をいただきました。当日は、好天気に恵まれ、世界最長の大橋を横から、下から、真近かに見ながら、構造、強度等のお話を

第二回支部総会盛大に開催
大阪支部
庶務幹事 金光健祐

わかりやすく興味深く拝聴しました。まさに機友会にピッタリの内容でした。ここに、明石海峡大橋のすばらしさの概要をいくつか記述します。

明石海峡大橋は、神戸と淡路島を結ぶ全長三九一メートルの世界最長のつり橋で、一〇年の歳月と約五〇〇億円を投じて建設されました。大橋は耐震・耐風設計法や水中不分散性コンクリートの開発による水中基礎施工など新技術を開発。また、超高強度鋼線の開発により、主ケーブル本数を半分にするなど、経済性と工期の短縮化をはかりました。特許だけでも一〇〇件をこえたとか。激しい潮流と強風という自然条件、さらに工事中に阪神淡路大震災に見舞われたにもかかわらず、工程通りに進んだ。しかも工事中の死亡事故がゼロというまさに神わざであった。この大橋の完成は、架橋技術で日本のモノづくりが、いかにすばらしいかを全世界にアピールしたと思う。

この大橋を淡路島に渡つたすぐのところは淡路花博「ジャパンフロラ二〇〇〇」がまもなく開催されます。テーマは「人と自然のコミュニケーション」。会期は二〇〇〇年三月一日から九月一七日までの六ヶ月間。明石海峡大橋を渡れば、そこは花と緑の島、感動と夢あふれる博覧会のステージに是非、ご家族、ご友人と一緒においでください。お待ちしております。

さて、兵庫支部は、BKCの発展に歩調を合わせ、「躍動的な兵庫支部」の実現に向けて努力をしております。校友の皆様のご健勝をお祈りしますとともに、積極的なご指導、ご支援をお願い申し上げます。

友会大阪支部総会のご報告を致します。大阪支部総会は、新大阪のメルパルク大阪で総会、講演会及び懇親会の三部構成で田中道七先生に講演をお願いし、来賓として島田泰男機友会会長、酒井達雄先生及び支部顧問の山元茂先生の出席を頂きました。

第一部総会は、午後五時から藤井副支部長の司会により中西支部長の挨拶に引き続き議案が出席者四四名により原案通り可決されました。

①支部活動報告 ②支部規約改正(役員増員の件) ③会計報告 ④役員改選

新役員 「支部長」中西一雄
「副支部長」菅野敦次 松本博文
藤井要八郎 奥田公具 越川伊一
「庶務幹事」金光健祐 芳田安弘
岸秀雄 巴敦則
「会計幹事」水船博之 豊留貞典
成瀬正雄
「監査」吉岡宏朗 村上一実
北条敬彦

北海道支部の発足
庶務幹事 保田宏治
(昭和五五年卒)

例年になく暑かった夏も終わり、木々も色づき始めた一〇月一日に立命館大学機友会北海道支部が発足しましたのでご報告いたします。このたびの北海道支部の設立につきましては、島田機友会会長、理工学部酒井教授に大変お世話になりました。最初の設立準備委員会が七月三日に開かれ機友会各支部の設立状況、立命館大学のびろこ・くさつキャンパスへの理工学部拡充移転についてお話をうかがい、卒業以来ご無沙汰していた母校の発展に驚かされました。第二回目の準備委員会は九月一九日に開かれ支部役員候補が六名集まり設立総会と懇親会の進行に

の悩みは、機友二二五〇名機友会員への通信費及び幅広い年代の機友にいかに参加して頂くかでありました。皆様の助言を頂き、支部活動を進めていきたいと考えております。最後に、機友各位の益々のご健勝と機友会及び母校の一層の発展をお祈りしますと共に今後とも私達に、ご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



北海道支部の発足
庶務幹事 保田宏治
(昭和五五年卒)

立命館大学機友会北海道支部設立記念総会



ついで打ち合わせを行ないました。設立準備委員会の開催場所は立命館大学慶祥高等学校のミーティングルームをお借りしましたが、その折には高杉校長、小野事務長に大変お世話になりました。立命館大学慶祥高等学校は一九九六年四月に開校し、さまざまな「新しいスタイルの教育」を展開し、北海道の高校教育に新風を巻き起こしています。また来春には付属中学の立命館慶祥中学校も開校し、中学・高校・大学の一貫教育システムを目指しているそうです。場所は札幌の副都心「新さっぽろ」に近い野幌森林公園に隣接する緑豊かな丘にあり、自然豊かな広大なキャンパスです。

さて、設立記念総会当日はあいにくの雨模様でしたが、機友会島田会長、理工学部酒井教授、校友課志垣課長と立命館慶祥高校高杉校長、小野事務長にご出席をいただき、立命館慶祥高校のコミュニティルームをお借りして開催しました。北海道には二五名の会員がいますが、今回出席した会員は準備委員会に集まっていた六名のみで、少々心細い出発になりましたが、島田会長からここにおられる皆さんは一騎当千の方々ばかりなのでがんばっていただきたいと激励のお言葉をいただきました。

心強い思いがしました。総会終了後、立命館慶祥高校の高杉校長から「立命館学園と北海道」と題した記念講演をいただきました。慶祥高校を開校するまでの苦労話や、現在の北海道教育の実態、関西から見た北海道人のことなど、耳の痛いこともありましたが、慶祥高校の自由で明るい校風を作っておられる校長のあたたかい人柄に触れた思いがしました。

懇親会は会場を新さっぽろのシエラトンホテル札幌に移して行ないました。昔話や母校の現在の様子など話が見み、予定の時間が瞬く間に過ぎてしまいい、場所をホテル最上階のバーラウンジに変えてさらに楽しいひとときを過ごしました。

このようにして、機友会北海道支部が無事発足し新しい第一歩を踏み出しました。今後の活動計画としては、出席した六名が全員役員となるような状況ですから、残りの会員にも参加を働きかけ、相互の親睦をはかり、母校の発展のため出来る限りのことをしたいと考えています。

最後に皆様の一層のご健勝をお祈りしますと共に、今後とも私たち北海道支部にあたたかいご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

学生時代の思い出

九州支部長 松村博久 (昭和三十三年卒)

立命館大学機友会の第十二番目の支部として北海道支部が設立されました。こととお慶び申し上げます。機友会のみならず、ご発展を祈念申し上げます。

当方の九州支部は、「機友会ニュース(第四号)」で報告しましたように、昨年の七月二日に設立しました。支部会則により、支部総会は隔年おきに開催されることになっておりますので、支部活動はこれからという状況です。事務局の酒井先生から「支部だより」の記事のご依頼を受けましたが、

個人的な内容でもよいとのことでしたので、以下に大学生当時の思い出を述べてみます。



小生の大学生時代は、一九五四年四月から一九五八年三月までの四年間で、物質や金銭には満たされていませんでしたが、比較的恵まれた先生など教育環境には比喩的恵まれました。とくに機械工学教室の先生方は、学位取得されて間もないかあるいは学位のための研究中で、みなさん大いに張り切っておられて、学生も授業や卒研で大きな刺激を与えられました。ただし当時の実験や実習の機器備品は、現代のびわこ草津キャンパスのものとは雲泥の差で、基礎原理を学ぶのには最低限利用できました。写真一は一九五五年一月二四日撮影のもので、機械実習工場で課題材料の加工をしているところです。使用中の旋盤はベルト駆動式で、プーリーへのベルト移動用アームと裸電球が印象的です。

また、学生生活を送るには親からの仕送りがなく、生活費を自分でかせぎながら勉強している苦学生が多いでした。したがって学生部にはいろいろなアルバイトの求人がありました。小生も家庭教師、大掃除、祭礼や映画のエキストラなどのアルバイトを経験しました。写真二は一九五七年七月一四日に比叡山登山ケール口の八瀬公園近くで、映画ロケの休憩中に撮ったものです。今は亡き喜劇俳優の花菱アチャコ氏の顔も大変懐かしく感じます。

記憶をたどると走馬灯のように頭の中を駆け巡りますが、紙面の関係で断片となりました。

中国支部の第一歩

庶務幹事 千葉利晃 (昭和四三年卒)

中国支部は平成九年九月に第九番目の支部として発足致しました。設立されてから早くも二年以上経過しました。この間、支部としては機友会本部の協力で、支部の会員名簿を作成し、若干の追加と訂正を加えたのみといついでいでしょう。また、この名簿も設立総

会に参加頂いた会員の皆様のみ配布したにすぎません。設立する苦勞もありますが、設立した支部の活動を活発にするには、これまで努力が要ることを痛感しています。

先日(一月一日(土))に、設立後初めての支部役員会を開催することが出来ました。現在、一月二日(土)に総会を開催すべく準備中です。

現在の中国支部の会員数は三七五名です。機友会会員は約七〇〇名だそうですが、約五％が中国支部の会員ということになります。その内訳は、岡山県九六、広島県一八〇、山口県六六、鳥取県一四、島根県一九名です。機友会ニュース第四号(平成一〇年二月二五日)によりますと、県別の会員数はそれぞれ、九八、一九四、五二、一三、一九名ですが、全体の変化はほとんどありませんが、広島県の会員数が大きく減少しています。また、県により会員数が大きく異なり、多い県と少ない県では一〇倍以上の差があります。今後、中国支部会員名簿をより完備したものにしていと考えています。



現時点では、多くの支部会員は中国支部の存在そのものをまだご存知ないと思われまふ。そこに、会員に支部の存在を知って頂き、支部活動を活性化するために、支部の会員名簿を全会員に配布することに致しました。費用はかかりますが、県別の名簿でもあり、今後の支部活動を行う上でも利用価値は高いでしょう。この、名簿を全支部会員に配布することは、総会などへのより多くの参加は、支部会費の納入が期待できるのではないかと考えからでもあります。

山口県では、県内の会員が集まり、何か活動出来ないかと考えられていまふ。県により対応はまちまちですが、中国支部としての活動は、まず支部役員がもう少し頻りに集まり、意見交換からはじめる必要があるとの意見があります。年齢構成も幅広いこのような会では、集まり、話をするところから、さまざま有意義な活動が生まれてくるのではないかと考えています。

先日の役員会では、この他に、総会の開催時期を一〇月中旬とし、開催場所を各県(鳥取県と島根県は会員も少ないのでどちらかの県)の持ち回りとするに致しました。また、中国支部ニュースを発行しては如何かなどの意見も出ました。滋賀支部では、「びわこ校友会ニュース」を発行されていますし、会員の近況でも載せれば結構面白いのではないかと考えています。

滋賀支部「会計監査」

石本与一郎氏(逝去)

当支部役員として創立以来ご尽力下さった石本与一郎氏(ダイトロンテクノロジー(株)及びダイトパワートロン(株)代表取締役社長)は平成一〇



訃報

年一〇月三十一日午前四時三〇分心不全のため急逝されました。ここに生前のご功績を偲びますと共に、謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

校友会滋賀支部会員一同



同窓会だより

三〇数年ぶりに 懐かしい「お母ちゃん」を囲んで 小野健二 (昭和三〇年卒)

一、はじめに
この春、私達三〇年卒の仲間には本当に久しぶりに、懐かしいお母ちゃんを囲んで楽しい一時を持つことが出来ました。通称「お母ちゃん」こと山本とみ子様は当時、理工学部の医務室で看護婦をして居られ誰もが一度はお世話になった方で、八四歳になられた今もお元気ですよ！という事をお知らせしたくて筆を取りました。

そもそも此の様な計画は、今年の正月、理工学部六〇周年記念の準備委員会の後、会食をしている時たまたま隣の席から「お母ちゃん(おとみさん)

に逢いたいなあ……」という数物のAさんの声が聞こえてきて、私も一瞬お母ちゃんに非常に懐かしくなり思わず席を立ってAさんと昔話に花を咲かせた事がありました。その時に近いうちにお母ちゃんと再会の機会を作ろうと思つた訳です。

二、出合いとその後

お母ちゃんの出合いのきっかけを作つてくれたのは仲間の一人である三角君です。彼の話によると昭和二八年春、陸上部で右足を捻挫し医務室で手当てを受けているうちに骨折と判り当時看護婦をしておられた山本様の紹介で府立病院へ入院、以後いろいろと親身になってお世話頂いたことから家族ぐるみのお付き合いが始まつたとのこと。また当時医務室ではいろいろなかラップの先輩や後輩たちがお母ちゃんと呼んで慕つていたとの事です。

昭和三〇年正月、彼の提案で皆で初詣に廻ろうという事になり、当時高校生であつたお母ちゃんのお嬢さんも一緒に、北野天満宮を振り出しに平安神宮、伏見稲荷、城南宮、石清水八幡宮、成田不動尊と一〇年分ほどのご利益を頂いて帰つたことを覚えております。

三、再会

鳥羽旅行以後は夫々仕事で忙しくなつた事もあり、永らく年賀状のやり取りのみのお付き合いが続いておりましたが、ぼつぼつ現役を離れ悠々自適の年代に入りますと昔を懐かしむ声があちこちから聞こえてきます。一方はじめに申し上げました通り私のメモリーに「お母ちゃん」という言葉が再登録されていますので、先ず森君の骨おりで梅田駅の近くの料亭に場所を設定、造幣局の桜の通り抜けに合わせ日時を決定の上お母ちゃんへの連絡を前記三角君に依頼し、再会の段取りに入りました。

さて四月一七当日、健康を案じて

おりましたお母ちゃん(この五月に満八四歳)が懐かしい美智ちゃん(S三〇年当時一緒に初詣に廻つた娘さん、今は立派なお母さんですが敢えて美智ちゃんと呼ばせて頂きます)と一緒に元気な顔を見せて頂き、文字通りお母ちゃんを囲んで懐かしい思い出、過ぎ来しことなど昔話に花を咲かせました。又当時我々学生と対等に親しい付き合い頂き実験のご指導をいただいた笠井先生、卒業以来初めてという顔ぶれを含めた兵庫支部の同期の方々にもお集まり頂き、飲むほどに酔うほどに笠井先生のカラオケも飛び出して文字通り学生時代に戻つて時の経つのを忘れぬ談話しました。

話はなかなか尽きませんが、宴の後、造幣局の近くにある帝国ホテルへ余韻を移し、ティールームで暫し再会の余韻を楽しみました。それでも名残は尽きませんがそこでお母ちゃんをお送りし、折角の桜の通り抜けを横目で眺めながら、「花よりビール」と缶を片手に大川の畔を散策し楽しかった一日を終りました。

四、再会を終えて想ふこと

「お母ちゃん」という言葉には淡い郷愁をそそる響きがあります。今回の「集まり」はそう云う意味から単なる同窓会とは一味違うものがあつたと思ひます。宴の中で皆さんの話を聞いていますとそこには無意識のうちにお母ちゃんに聞いて貰いたいことが多々あつたのではないのでしょうか。又それらをきちんと受けとめて貰えるからこそ、多くの先輩や後輩達が「お母ちゃん」といつて慕つてきたのだと思ひます。今回は卒業以来初めてという大変懐かしい方々にも参集頂き順番に近況その他を拝聴致しました。卒業以来四〇数年、決して平穏な日々ばかりでは無かつたと思ひます。又夫々に歩んできた道は違つてもそれらの苦難を乗り越えてきたという満足感が皆様の顔ににじみ出ていたように想ひます。更にこの満足感はどこから出ているのかと考へるとき、共通して云えることは皆夫々に「青い鳥」を見付けるすべを心

得、大きさこそ違え間違ひなく同じ色で同じ姿の「青い鳥」を心のなかにお持ちだからと思ひます。今回はお母ちゃんをはじめ懐かしい方々にお集まり頂き、最高に幸せな一日であつたことに感謝して筆を置きます。

特別寄稿についての経緯

昭和三〇年卒 小野健二
この春、私達のグループは前記の通り、お母ちゃんこと山本とみ子様を囲んで楽しい一時を持ちました。その前後にお宅を訪問し、山本様の貴重な体験談をいろいろと聞かせて頂きました。その中でも特に印象に残る思い出を綴つて頂きましたので、お披露させていただきます。

山本様は昭和二〇年四月から三一年間主として理工学部医務室に看護婦として勤務された方で、初代総長中川小十郎先生の奥様のお氣に入りで色々とお世話をされた事もあると思つております。

今回は戦争末期、空襲の激しい中を豊川の軍需工場(動員中の我々先輩を



お母ちゃんを囲んで 大塚敬典「多摩川」にて '99. 4. 17

看護に行かれた時の生々しい様子が綴られていきます。当時亡くなりましし諸先輩のご冥福を祈りながらご覧下さい。最後にも拘らず、快く原稿を引き受けて頂きました山本様に厚く御礼申し上げます。

特別寄稿 II
思い出
山本とみ子

先づ初めに此の機会に恵まれた事を感謝致します。
突然の御指名に戸惑いながらペンを取りました。

さて私が立命館に採用されましたのが昭和二〇年で御さる。四月一日初出勤いたし学内に学生諸君の姿がほとんど見受けられず大変驚いた事を覚えております。つまり大部分の学生諸君は学徒動員により軍需工場其の他へと動員され学内に残されたのは学校警備隊と病弱の学生諸君だけだったので。毎日勉学と容赦ない軍事教練を強いられる学生諸君を目のあたりにする度に私達の胸が痛み見るに忍びない日々でした。

終戦直前の或る日広小路学舎の学生諸君が四人動員先(豊川海軍軍需工場)で爆撃にあい尊い命が失われました。大学からの指示により現地の負傷者の為我々は豊川へ急行致したところ宿舎の門前で入寮許可がなかなか下りず問答を続けておりましたところ、これら一連の問答を聞きつけた一人の学生が叫びました、「学校から来てくれはったで！」と早朝にもかかわらず直ちに整列し、滂沱ながら最敬礼で迎えてくれた姿は私の脳裏を離れる事はなく思ひ出す度に涙がこぼれる次第です。

豊川の宿舎へまわり痛ましい皆さんの姿を目前にして思はず目頭が熱くなりました。四人の位牌は木製の手作で心のこもった位牌が祭られてあり胸を打たれ涙ながらに合掌した悲しい思い出が御さる。学生諸君は朝夕友の

位牌に合掌して居られる姿は無念と悲しみに溢れんばかりでした。三、四日豊川で皆さんの手当をして帰京いたしました。其の後間もなく終戦を迎え動員先から学生諸君が復学され学内は活気に満ち動員中の学業の遅れを取りもどすべく勉学に熱中する学生諸君でした。

しかしながら食糧事情との戦いの連続でもありました。或る日突然衣笠寮から寮生病気との知らせで寮へ急行したところ患者さんは肺結核でした。早速入院寮内消毒などで慌てた事もあり振り返ればまだまだ未熟な私が学生諸君に頼られていたのだと思いを、はせております。

又或る日実験中鉄粉が眼球にささり心配しながら遠藤先生と共に府立病院へと走り診察の結果手術と及び大事に至りませんでした。長い入院生活を余儀なくされ退院後登校出来る様になり胸をなでおろした事もありました。思えば長い年月実験室(機械電気化学土木)数物と共に歩んだ気が致します。在職三年の間に皆様も御存じの学園紛争もありました。

今日国際化グローバル化と社会が変化してまいりましたが戦後の物資のない時代にはそれなりの良き日本の姿がありました。時代の変化を見るに至りいささかの不安を覚えずにはおられません。まだまだ書きたい事が御さるますが年と共に思ふにまかせず、これにてペンをおかせて頂きます。今後は学園の発展と皆様の御活躍を心より願ふ次第で御さる。

* 涙がとめどなく流れるさま



満84花魁、お祝ひ 山本とみ子様

事務局だより

立命館大学理工学部は一九三八年に立命館高等工科学校として発足以来、現在、満六〇周年を迎えており、人間に例えれば丁度還暦を迎えたこととなります。このような記念すべき節目に、本年一〇月一日に北海道支部が設立され、島田会長のご指導のもとに過年来取り組んで参りました全国規模の機友会支部組織が、会員各位の熱意溢れるご支援により、ほぼ完成したことになります。長年にわたる会長の卓越したご指導と、全国各地で遅しくご活躍されている会員各位の絶大なご支援に対し、事務局の立場からここに厚くお礼申し上げます。

また、島田会長にあつては本年一月七日開催の第一七回定時総会を機に会長職を後進にバトンタッチされることになりましたが、前会長・大南正瑛先生の立命館総長ご就任にあたり大南総長から特に請われて会長をご承引頂いた経緯がございます。したがって、会長の在任期間は前会長の総長在任期間の八年と丁度重なることとなります。機友会会長として、また、(学)立命館評議員として機友会の発展ならびに立命館学園の発展に対して、物心両面にわたり大変なご指導とご支援を賜りましたこと、事務局として重ねて厚くお礼申し上げます。

さて、今回の「機友会ニュース」(No. 5)発行にあたり、各支部関係者や多くの会員各位に貴重な原稿をお寄せ頂きました。ご多忙の中、種々、ご支援とご高配を賜りましたことに対し、衷心より謝意を表したく存じます。

機友会としては今後、本部と各支部との交流や相互支援など、会員各位のご意見を頂きつつ、「楽しく力強い機友会」を目指して努力を重ねたく存じます。今後とも幅広くご支援を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。最後になりましたが、会員各位の益々のご健勝とご清祥をお祈り申し上げます。

立命館大学機友会事務局
〒525-8577
滋賀県草津市野路東 1-1-1
立命館大学 理工学部 機械工学科
TEL 077 (561) 2664
FAX 077 (561) 2665

3自由度アームを用いた学生実験

ロボットの制御プログラム開発の教育用として当学科で設計、製作されたものです。

バーチャルリアリティ実験

仮想現実感によって種々の環境を人工的に創作し、人間特性を計測、解析します。

マイクロ車

立命館大学のシンクロトロン放射光装置とマイクロプロセスによって製作されたものです。